中学校分科会

第4分科会

生徒の考える力を英語科の授業で育む
～ICE モデルの考え方を取り入れた英語授業の実践～

発表者：滋賀大学教育学部附属中学校　林　秀　樹
助言者：関西大学　竹　内　理

研究の目的

思考力・表現力の向上のためには，生徒の学習過程において，生徒の学びの質を高めることが大切である。その学びの思考の過程をとらえるための一例として，Sue Fostaty Young Robert J.Willson (2013)の ICE（アイス）モデル（以下 ICE）がある。ICE とは，I は Ideas（基礎知識），C は Connections（つながり），E は Extensions（応用）を意味している。つまり，基礎的・基本的な知識・技能を理解して習得し，既習の内容や実生活との関係性やつながりを見つけて活用できる知識，技能に高め，新しく学んだことを違った場面でも応用して，新たな価値観や見方を創造できることを目指すものである。英語科の授業の中でも ICE を適用した授業とその評価を実施し，発問や課題の設定を工夫し，生徒の学びをより「深い学び」に変えていきたい。

第5分科会

やり取りを入れたプレゼンテーション
～ICT 機器を活用し、英語で人と“つながる力”の育成～

発表者：　甲賀市立土山中学校　奥　村　安　敬
助言者：　大阪成蹊大学　赤　沢　真　世

研究の目的

英語で人と“つながる力”とは、英語でコミュニケーションを取ることで、相手と友好的な人間関係を作る力と考える。前任校の草津市立玉川中学校では、タブレットを用いたプレゼンテーション活動が盛んで、英語の授業でもタブレットでスライドを見せながらのプレゼンテーションをしていた。しかし、話し手が一方的に話し、聞き手が静かに聞くという発表であった。そこで、発表の中に「即興のやり取り」を取り入れることで、双方向のコミュニケーションを可能にし、話し手と聞き手が英語でつながれる、聴衆参加型のプレゼンテーションを目指した。

第6分科会

生徒の「書くこと」の力を高めていく指導について

～「聞くこと」「話すこと」「読むこと」をつなげ、意欲的に「書くこと」に取り組む工夫～

発表者：長浜市立びわ中学校教諭　野　村　由　紀　子
助言者：愛知教育大学教授　高　橋　美　由　紀

研究の目的

小学校で培った英語力は「聞くこと」「話すこと」が中心であり、音声による理解はある程度できる。しかし、「書くこと」の指導については、ほとんどなされていないことから、「書くこと」に対する困難さを感じている生徒が多い。そこで、教科書で学習した内容をもとに生徒が興味を持って取り組める言語活動を工夫しながら、生徒の「書く力」を高めていくことを目指したい。

第7分科会

英語の読み書きの学習における記憶の負担が生徒に与える影響の検証および記憶の負担を軽減し、記憶を安定させる具体策の提示

発表者: 甲賀市立水口中学校　大友 かおり
助言者: 大阪教育大学　加賀田 哲也

研究の目的

特別支援学級のみならず通常学級においても、生徒が感じる英語学習における読み書きの困難さ(dyslexia 的傾向)は、学習方法にも原因があるために生じるもので、その困難さは克服できることを検証する。従来の単語や文の綴りを繰り返し、読んで書いて覚えるという方法以外にも学習者にとって負担の少ない記憶方法があり、その方法により、読み書きへの不安や苦手意識が軽減され、記憶の安定が可能になることを提示する。また、綴りを覚えられたという自信が学習意欲を向上させ、言語習得に必要な他の能力のみならず、学習者の自尊心や他者への尊敬の念も高めることも検証する。

第 8 分科会

コミュニケーションにおける「即興で伝え合うやり取りと発表」
～温故知新、新学習指導要領と明治から150年目の今とを対比しての取り組み、新しい夜明けが待っているぜよ～

発表者: 湖南市立甲西北中学校　山 口 朋 久
助言者: 京都外国語大学　杉 本 義 美

研究の目的

新学習指導要領が告示され、外国語科の『話すこと』の目標も「やり取り」と「発表」に分かれた。その中でも、即興で伝え合うことや話すことが新たに示されている。様々なレベルの生徒が在籍する公立中学校では、英語で『話すこと』の活動には多くの不安がつきまとう。話す活動を成功させるためには、生徒の不安を少なくし、自己効力感を高めていかなければならないと考える。自己効力感が高まり、さらなる仕掛けをした『話すこと』の活動を取り入れることで、即興でのやり取りや発表ができると仮定する。

また今年は明治から150年目の節目の年となる。英語の辞書や教科書などままならない時代に日本にいながらにして、かなりの英語力を身につけた日本人がいたことを知った。彼らは西洋かぶれをすることなく、外国文化との真の交流を実践した。英語の辞書すらないような劣悪な学習条件で身につけた驚くべき即興で話す力や彼らの英語力は、現代の我々の格好のお手本ではないか。150年前の日本人が取り組んできた学習方法は、『話すこと』の即興でのやり取りと発表ができる生徒の育成になると考え、研究に取り組むことにした。

第9分科会

多読教材を通して主体的に英語を読む態度を育成する指導の工夫

発表者:　滋賀県立水口東中学校　伴 野 恭 士
　　　　滋賀県立水口東高等学校　山 下 泰 世
助言者:　岐阜大学教育学部　巽　徹

研究の目的

本校は中高一貫教育校として、中高が連携しながら、生徒の進路実現を達成することを目標にしている。本校の英語教育の課題の一つは、6年間を見通した英語指導体制を確立することである。二つ目は読む力を高めることである。朝の読書や国語科の読書課題を通して読書習慣を身に付けた生徒はいるものの、英語の長文読解に苦手意識を持つ生徒が多いのが現状である。このような課題を踏まえ、中高を通して読む力を高める取組を行う必要性を感じ、指導改善を試みた。どのような指導で生徒の読む力が高まるのか、どうすれば英語を読む楽しさや学習の深さを味わう生徒を育てることができるのか、という点に着目し、多読教材を活用した指導の可能性を追究した。

第20分科会

小・中の深い連携と滑らかな接続を目指して

発表者:大津市立堅田中学校　押 田 英 貴
助言者:滋賀県教育委員会事務局　山 本 祐 司

研究の目的

平成24年度滋賀県 小・中連携研究推進事業として、大津市立堅田小学校における専科指導(小学校外国語活動)を通して経験したことを基に、その後の大津市立堅田中学校での授業改善につなげる。

第21分科会　中学校授業実演

即興的な対話力と発信力の育成　～言語活動の指導と評価～

授業者:竜王町立竜王中学校　関 口　真
助言者:関西大学　今 井 裕 之

研究テーマ設定の理由

多くの日本人が苦手だと言われている「即興的に自分の言葉で英語を話す」ことができる生徒を育てたい、積極的な姿勢で前向きに英語と向き合い、生き生きと表現できる生徒を育てたいという思いからこの研究テーマを設定した。2016 年度に学習指導要領が改訂され、2020 年度から全面実施となる中学校において、今まで以上に内容に踏み込んだ言語活動が重視されるとともに、これからますます即興的な言語活動が重要となると考えた。また、英語の即興力とともに、すべての英語運用能力に必要な「知識・技能」が身につくような言語活動とその評価について研究したいと考えた。

第22分科会

気軽にどんどん Writing
～間違いを恐れず即興で、「書くこと」の力の育成を目指して～

発表者:甲賀市立甲賀中学校　廣 岡 弘 美
助言者:京都外国語大学　杉 本 義 美

研究の目的

小学校では、英語を「聞くこと」や「話すこと」に慣れ親しんできた生徒が、中学校では、まとまった英文を「書くこと」に抵抗を感じる。「話すこと」とは対照的に、「書くこと」は間違いがはっきり残り、自分の力量を認識しやすい。本校の生徒は、英語を「書くこと」については65%の生徒が苦手意識をもっている(2017年度中学2年生対象のアンケートによる)。その理由として、文法や単語のつづりを間違ってしまうことなどが挙げられる。よって、間違いを気にしてなかなか書き進められない様子が多数見られる。一方で、英語を「聞くこと・読むこと・話すこと・書くこと」の4技能のうち、「書くこと」の力を一番伸ばしたいと思う生徒も多い。

accuracy(正確さ)に重点を置いたり、辞書を使って時間をかけて英文を書いたりする活動に加え、本研究では、教科書で学習した表現等を使い、身近なことに関して即興でまとまった英文を書く活動を取り入れることにした。この取組の継続により、「書くこと」への抵抗をなくし、「書くこと」の fluency(流暢さ)の育成を目指していきたい。

第23分科会

外国人生徒のための英語科の授業づくり
―子どもたちの言語文化背景が生きる指導・支援の工夫―

発表者:湖南市立日枝中学校　青 木 義 道
松 野 萌 恵
助言者:東 京 学 芸 大 学　齋 藤 ひろみ

研究の目的

滋賀県南部の湖南市に位置する日枝中学校区には、ブラジルやペルーからの南米出身の外国人が多数居住している。その子弟の多くが通う本校は、全校生徒の約1割が外国人生徒である。保育園や幼稚園の頃から様々な国籍の子どもたちが共に生活する環境であるため、多くの生徒は日本の生活に適応しているが、思考を支える学習言語

能力の発達が十分ではないために、学校では学習上の困難を抱える場合が少なくない。母文化を価値づけられない生徒も存在する。そうした中で、あるブラジル人生徒の「英語は平等に学習できる唯一の教科」ということばに、「英語学習」が、学習に自信をもち進路を切り開いていくきっかけになると感じた。母語のポルトガル語・スペイン語の力を構造の似た英語の理解に繋げるために、英語の授業で工夫を試みてきた。また、言語活動で彼らの母文化を取り上げ日本人生徒との相互理解をはかった。内容を中心にしたコミュニケーション活動では、フォーカスオンフォームを導入した。

第24分科会

今こそ書く力!～「書くこと」の指導の視野を広げるアプローチ in Shiga～

発表者:滋賀県中学校教育研究会英語部会(滋賀中英研)
西田 宗司 富田 浩子 牧野 尚史 椙本 はる香
助言者:東京家政大学 太田 洋

研究の目的

小学校の外国語活動が活発化する中、「聞くこと」や「話すこと」の指導に関する研修が多く取り上げられている。そのため生徒が楽しく意欲的に取り組む実践例なども数多くある。中学校では「聞くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」の指導が比較的多く行われているように思う。一方、「書くこと」の指導に関しては、「書く指導をする時間がなかなかとれない。」、また「評価をどのようにすればいいか悩む。」などの理由から敬遠されがちなようである。ただ、「書くこと」の指導は必要であり、重要だと思う教員は少なくない。

そこで現状を打破するために、滋賀の中学校英語教員の「書くこと」の指導に対する意識を変え、生徒の「書く力」の向上につなげていくことが本研究の目的である。

第 25 分科会

中高一貫教育校における英語ディベート指導のあり方研究
～ディベートを通した中高生の絆プロジェクト～

発表者: 滋賀県立守山中学校・高等学校 戸 田 行 彦
助言者: 桃山学院教育大学 鈴 木 寿 一

研究の目的

本校は併設型の県立中高一貫教育校であり、中学校では特色ある科目で準備型の英語ディベートを、高校では英語表現の授業で即興型の英語ディベートに取り組んでいる。

このような現状のもと、本研究の目的は、中学校での取り組みと高校での取り組みを今一度振り返り、中高一貫教育校として双方で取り組んでいる英語ディベート指導を、「中高接続」を一つの観点により良くし、発展させることである。そこで以下の二つの仮説を立てた。

仮説① 英語ディベートを始める時は、中高生とも準備型から学習するべきである。
仮説② 中3生と高1生の合同交流授業は中高生にとって、学びの中高接続をスムーズにする上で有意義である。

第26分科会

「生徒が動く」タブレットを活用した授業実践
～アクティブ・ラーナーを目指して～

発表者:立命館守山中学・高等学校 辻 大樹
助言者:立命館学園 橋詰 龍

研究目的

急速な情報化が進む社会において、主体的な情報活用能力を育成することも重要視されてきている。新学習指導要領では、教科等横断的な視点に立った資質・能力として、情報活用能力が言語能力や問題発見・解決能力と並び、学習の基盤となる資質・能力として位置づけられており、これまで以上に ICT が大きな役割を果たすと期待されている。さらに、文部科学省では「次世代の教育情報推進事業」を実施し、各推進校における実

践を基に、ICT を活用した指導方法や授業改善などの研究を進めている。
　このような状況の中で、本校においても 2014 年よりタブレット(iPad)を導入し、本格的な ICT 教育に取り組み始めた。現在では全生徒が 1 台のタブレットを所持し、英語の授業に限らず、あらゆる教科において、タブレットが授業内で利用されている。しかし、関心が高まる一方で、タブレットの活用法に関してはまだまだ未開拓な部分が多く、その実践例も極めて少ない。そこで、本研究では、主体的学び、生徒が動く学びを促す ICT 教育の指導法を考案し、従来の授業では課題とされていた様々な問題を解消し、より効果的に英語の運用能力を高めていく実践モデルを提案する。